第１章　テレビ塔の誕生：テレビ黎明期のタワー

1　日本テレビ放送網編（1984）『テレビ塔物語』日本テレビ放送網、p181
2　毎日新聞 1951 年 9 月 4 日朝刊「来春には放送開始か　テレヴィ会社の構想進む」
3　浦田好雄（1953）「テレビスタジオの完成まで」『国際建築』9 月号、p52
4　柴田秀利（1995）『戦後マスコミ回遊記』上巻、中公文庫、p327
5　読売新聞 1952 年 8 月 12 日朝刊「テレビ 2 月から放送　スタジオ、送信所年内完成　放送網免許後初の発起人会」
6　岸信介（1969）「セルフ・メイドの男」『一心　大谷米太郎』大谷米太郎追想録刊行委員会、p177
7　日本テレビ放送網編（1984）『テレビ塔物語』日本テレビ放送網、p215-216
8　三鬼陽之助（1959）『抜討ち財界』財界研究所、p57-58
9　柴田秀利（1995）『戦後マスコミ回遊記』上巻、中公文庫、p328
10　日本テレビ放送網編（1984）『テレビ塔物語』日本テレビ放送網、p215-216
11　日笠有二（1942）『不二木人：随筆』東洋経済新報社、p135-136
実業之世界社編（1978）「早川千吉郎の巻」『実業の世界』4 月号、実業之世界社、p116
12　金沢市史編さん審議委員会編（1969）『金沢市史（現代篇）』上巻、p363
13　読売新聞 1922 年 10 月 23 日朝刊「早川氏の保険金　二百万円に上る　頼まれゝば断われずに契約日本最初の新記録」
14　早川が入手する前、この土地には旧唐津藩の小笠原家の屋敷があり、その後、成女学校（のち成女学園中学校・成女高等学校）の敷地となった。1906（明治 39）年に成女学校が牛込区富久町に移転し、その跡地に早川が自邸をつくった。
15　日本建築学会編（1910）「近年新築の邸宅」『建築雑誌』5 月号、日本建築学会、p29
16　保科孝一（1952）『ある国語学者の回想』朝日新聞社、p256
17　内田信也（1951）『風雪五十年』実業之日本社、p27
18　内田信也（1951）『風雪五十年』実業之日本社、p27
19　読売新聞 1923 年 5 月 15 日朝刊「早川氏遺愛の売立てに雪舟一幅が十四万円也」
20　東京朝日新聞 1922 年 10 月 7 日朝刊「成金の罪滅しだと　内田信也氏が須磨御殿を売却して附近に質素な文化生活　警官や教員に家屋寄附」
21　読売新聞 1925 年 4 月 18 日朝刊「買ひ手を探す早川邸、百万円のお払い物　張作霖氏が東京の下屋敷にもと手を出して流れた建物」
22　大谷米太郎（1992）「大谷米太郎：苦労したタネ銭がなければ」『私の履歴書：昭和の経営者群像 5』日本経済新聞社、p75
23　読売新聞 1952 年 9 月 22 日夕刊「厳かに放送局地鎮祭　「テレビ放送網」力強い第一歩」
朝日新聞 1952 年 9 月 22 日夕刊「"日本テレビ"地鎮祭　千代田区二番町の建設地で」
24　浦田好雄（1954）「NTV の建築設備と鉄塔工事」『建築界』3 月号、理工図書、 p 34

25　浦田好雄（1954）「NTV の建築設備と鉄塔工事」『建築界』3 月号、理工図書、 p 34
日本テレビ放送網編（1984）『テレビ塔物語』日本テレビ放送網、p189-191
26　浦田好雄（1954）「NTV の建築設備と鉄塔工事」『建築界』3 月号、理工図書、 p 34
27　電波新聞 1953 年 7 月 25 日「NTV 本放送へ　送信機据つけ」
電波新聞 1953 年 8 月 1 日「電波人百撰　大鉄塔を越える夢　真実と取ツ組む　正力松太郎氏」
28　読売新聞 1953 年 8 月 28 日夕刊「日本テレビ放送網　華やかに開局式　式次第鮮やかに映像　首相もニコニコ顔で祝辞」
29　電波新聞 1953 年 8 月 31 日「NTV 華々しく開局　各界名士集め盛大に　首相も珍しく笑顔で挨拶」
30　浦田好雄（1954）「NTV の建築設備と鉄塔工事」『建築界』3 月号、理工図書、p35
31　読売新聞 1953 年 12 月 13 日夕刊「テレビ塔へ　日曜の人波」
32　海外に目を向けると、鉄塔に展望台を設けた例としては、エッフェル塔や西ベルリンのラジオ塔等が既に存在していた。
33　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p11
34　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p11-12
35　高柳健次郎・山下彰（1980）「テレビジョン創世期における研究」『ろくじ会記録』No.21、p19-20
36　五嶋丙午郎・新海政澄（1980）「川口鉄塔の設計・円管柱アンテナの建設」『ろくじ会記録』No.22-2、p9
37　東京都建設局公園緑地部編（1985）『東京の公園 110 年』東京都建設局公園緑地部、p262
38　東京都建設局公園緑地部編（1965）『東京都の風致地区と自然公園』東京都建設局公園緑地部、p7
39　毎日新聞 1951 年 12 月 11 日朝刊「都内の六ヵ所に『風致地区』　上野などから利権屋、ボスを締出し　〝緑と水〟でいこいの場所に」
40　五嶋丙午郎・新海政澄（1980）「川口鉄塔の設計・円管柱アンテナの建設」『ろくじ会記録』No.22-2、p10
41　都民室首都建設部（1953）『首都建設問題の経過概要（第 2 集）首都建設資料昭和 28 年 3 月末現在』、p20
42　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p12
43　五嶋丙午郎・新海政澄（1980）「川口鉄塔の設計・円管柱アンテナの建設」『ろくじ会記録』No.22-2、p9
44　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p12-13

45　秩父宮と NHK テレビには少なからぬ縁があった。秩父宮が亡くなったのは NHK 本放送開始の直前だったが、実験放送を目にしていた。秩父宮はテレビに強い関心を持っていたらしく、主治医の寺尾博士の患者のつてで銀座の楽器店でテレビを観ている。鵠沼の自邸にテレビを設置してもらい、熱心に観ていたという。だが、実験放送中のことだったため、画面は不鮮明で時間も短いものだった。

46　五嶋丙午郎・新海政澄（1980）「川口鉄塔の設計・円管柱アンテナの建設」『ろくじ会記録』No.22-2、p3-4

47　宇佐美は、1953（昭和 28）年 12 月に第 2 代宮内庁長官に就任後、1959（昭和 34）年の皇太子と美智子妃の成婚、1968（昭和 43）年の新宮殿の造営、1971（昭和 46）年の昭和天皇の欧州歴訪等に尽力したことでも知られる。

48　五嶋丙午郎・新海政澄（1980）「川口鉄塔の設計・円管柱アンテナの建設」『ろくじ会記録』No.22-2、p4-5

49　同月には、勢津子妃が鵠沼から都内に転居することが決まり、宮内庁長官公邸は仮御殿として利用されることになった。

50　読売新聞 1953 年 5 月 16 日朝刊「〝極東に誇るスタジオ〞ダ博士、日本テレビ放送網見学」

51　第 17 回国会衆議院電気通信委員会第 7 号 1953 年 11 月 26 日（齋藤憲三委員の発言）

52　第 17 回国会衆議院電気通信委員会第 7 号 1953 年 11 月 26 日（塚田十一郎郵政相の発言）

53　日本テレビ放送網編（1959）『日本テレビの歩み』日本テレビ放送網、p3

54　古垣鉄郎（1951）「わが国におけるテレビジョン放送は如何にあるべきか」『電波時報』10 月号、電波振興会、p24

55　連合国最高司令官高級副官 K・P・ブッシュ准将からド・フォレー宛書簡 1949 年 11 月 5 日付（日本テレビ放送網編（1959）『日本テレビ発行文書綴（和文）昭和 26-34 年』日本テレビ放送網、p7-8）

56　連合国最高司令官ダグラス・マッカーサーからカール・ムント宛書簡 1950 年 7 月 1 日（奥田謙造（2015）『戦後アメリカの対日政策と日本の技術再興』大学教育出版、p59-60）

57　同日 13,904 人の追放が解除されており、その中には鳩山一郎、小林一三らもいた。

58　読売新聞 1951 年 8 月 7 日朝刊「抱負を語る　解除の人々」

59　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p6

60　網島毅（1992）『波濤：電波とともに五十年』電気通信振興会、p389

61　網島毅（1992）『波濤：電波とともに五十年』電気通信振興会、p391

62　有馬哲夫（2011）『日本テレビと CIA　発掘された「正力ファイル」』宝島社、p192-193

63　国会社編（1969）「〝各国代表〞が悼む正力氏の生涯　抜群の意表を全うした巨人！」『国会』11 月号、国会社、p30-31

64　1951（昭和 26）年 1 月 24 日に受信契約者数が 900 万世帯を突破した（日本放送協会編（2001）『20 世紀放送史：年表』日本放送協会、p146）

65　田中香苗（1975）「足立さんと私」『足立先生を語る』東京放送、p23
66　鹿倉吉次・前田義徳（1965）「対談　放送界今昔　―放送のきのう・きょう・あすを考える―」『放送文化』3 月号、日本放送協会、p16（鹿倉吉次の発言）
67　毎日新聞 1952 年 6 月 17 日朝刊「ラジオ東京、テレヴィ放送許可申請」
68　郵政省編（1961）『続逓信事業史』第 6 巻、郵政省、p165
69　今道潤三（1974）「テレビ二十年：民放界の重鎮が語るテレビ時代の内幕（第一回）」『財界』2 月 15 日号、財界研究所、p102-103
70　中部日本放送編（1959）『民間放送史』四季社、p283-284
71　今道潤三（1974）「テレビ二十年：民放界の重鎮が語るテレビ時代の内幕（第一回）」『財界』2 月 15 日号、財界研究所、p103-104
72　今道潤三・久住悌三・前田義徳・十返肇（1958）「座談会テレビ塔の風あたり：編集局長の言い分」『中央公論』4 月号、中央公論社、p92（今道潤三の発言）
73　鹿倉吉次・前田義徳（1965）「対談　放送界今昔　―放送のきのう・きょう・あすを考える―」『放送文化』3 月号、日本放送出版協会、p23（鹿倉吉次の発言）
74　東京放送編（1970）「小伝：八十四年の生涯」『鹿倉さんをしのぶ』東京放送、p250
75　今道潤三（1974）「テレビ二十年：民放界の重鎮が語るテレビ時代の内幕（第一回）」『財界』2 月 15 日号、財界研究所、p103
76　東京放送編（1970）「小伝：八十四年その生涯」『鹿倉さんをしのぶ』東京放送、p251
77　東京放送社史編集室（1965）『東京放送のあゆみ』東京放送、p67
78　東京放送社史編集室（1965）『東京放送のあゆみ』東京放送、p68-69
79　電波新聞 1953 年 8 月 25 日「東洋一の放送会館　六千坪にテレビ、ラジオスタジオ　KR、ビル建設を決定」
80　東京放送社史編集室（1965）『東京放送のあゆみ』東京放送、p69
81　志賀信夫（1975）『素顔の放送人』電波新聞社、p72
82　諏訪博（1999）「揺籃期のテレビ放送」『高度成長期への証言』下巻、日本経済評論社、p118-119
83　毎日新聞 1954 年 8 月 22 日朝刊「半年がかりの大工事　『ラジオ東京』のテレビ塔」
84　遠藤幸吉（1955）「ラジオ東京テレビジョン」『テレビジョン』4 月号、テレビジョン学会、p106
85　第 15 回国会衆議院電気通信委員会第 15 号 1953 年 2 月 5 日(長谷慎一郵政省電波監理局長の発言)
86　第 17 回国会衆議院電気通信委員会第 7 号 1953 年 11 月 26 日（長谷慎一郵政省電波監理局長の発言）
87　今道潤三・久住悌三・前田義徳・十返肇（1958）「座談会テレビ塔の風あたり：編集局長の言い分」『中央公論』4 月号、中央公論社、p90（前田義徳の発言）
88　中部日本放送（1959）『民間放送史』四季社、p284
89　原田憲（1970）「父とも仰ぐひと」『鹿倉さんをしのぶ』東京放送、p86
90　東京放送社史編集室（1965）『東京放送のあゆみ』東京放送、p70

91　分部芳雄（1982）「アンテナ物語り」『TBS 放送事はじめ：有楽町から赤坂へ』東京放送旧友会発行、p55
92　第 24 回国会衆議院逓信委員会第 4 号 1956 年 2 月 9 日（松前重義委員の発言）
93　テレビジョン学会編（1955）「海外情報：ロンドン商業テレビ局の臨時送信所」『テレビジョン』1 月号、テレビジョン学会、p31
94　テレビジョン学会編（1956）「TV.ニュース：BBC と ITA がアンテナ塔共用」『テレビジョン』1 月号、テレビジョン学会、p42-43
95　第 24 回国会衆議院逓信委員会電波及び放送に関する小委員会第 3 号 1956 年 3 月 8 日（浜田成徳郵政省電波監理局長の発言）
96　11 チャンネルに増えたからと言ってすべて使用できるわけではなく、電波の干渉を防止するために 1 チャンネルおきに設けることとなっていた。当時、3ch は NHK、4ch は日本テレビ、6ch はラジオ東京が使っていたため、1ch、8ch、10ch の 3 つが新たに使用可能となった。
97　フジテレビジョン編（1970）『フジテレビジョン十年史稿』フジテレビジョン、p56
98　フジテレビジョン編（1970）『フジテレビジョン十年史稿』フジテレビジョン、p56
99　フジテレビジョン編（1970）『フジテレビジョン十年史稿』フジテレビジョン、p58-59
鹿内信隆（1988）『泥まみれの自画像』上巻、扶桑社、p189-190
100　フジテレビジョン編（1970）『フジテレビジョン十年史稿』フジテレビジョン、p54-56
101　鹿内信隆（1988）『泥まみれの自画像』上巻、扶桑社、p188-189
102　松尾三郎（1958）「東京タワーの建設について」『電気通信』12 月号、電気通信協会、p14
103　電波新聞 1956 年 2 月 8 日「「テレビ準備委」を設置　LF カラー移行前提に推進」
104　放送局の開設の根本的基準第 6 条の 2 第 1 項第 3 号には「その局を開設することにより、一のテレビジョン放送を行う放送局の放送区域内において又は放送区域の大部分を共通にして、二以上のテレビジョン放送を行う放送局があることとなる場合には、その局の送信空中線の設置場所は、他のテレビジョン放送を行う放送局の送信空中線に近接した所であること」とある。また、日本電波塔株式会社の松尾三郎は「半径 2 キロ以内に送信所をまとめるようにと要請されております」と郵政省から指導があった旨を述べている（松尾三郎（1959）「東京タワー建設について（其の一）昭和 34 年 2 月 18 日関東支部講演」『送電線建設資料』第 5 集、送電線建設技術研究会、p315）
105　毎日新聞 1951 年 9 月 27 日朝刊「由緒ある芝公園　都から増上寺へ返還」
106　都の管理から外れたとはいえ、都市計画公園区域内であったため、建築物等をつくる際には制限を受けることになる。また、芝公園一帯は風致地区にも指定されていたため、その規制もかかる。
107　清水伸（1982）『前久外伝』誠文図書、p297-298
108　1965 年にアンテナの高さを 3.8m 伸ばし 217m となった。
https://www.fernsehturm-stuttgart.de/en/fernsehturm/bauwerk.php
109　渡邉敏（1977）「〈原町〉野馬追・無線塔、そして公共下水道」『市政』9 月号、全国市長会館、 p 60
110　内藤多仲（1963）「鉄塔あれこれ」『建築雑誌』2 月号、日本建築学会、 p 82

111　鉄骨造でつくるにあたって約 4,000 トンもの鉄が必要で、鉄の手配は設計開始とほぼ同時期に行われた。だが、造船の鉄鋼需要の高まりで供給が追いつかず、実際の契約は 1957（昭和 32）9 月にずれ込んだ。この間に、造船関連の鉄鋼需要が一段落し、鉄の価格は 1 トンあたり 9 万円から 6 万円に下がっていた。実際に契約した鉄材は 3,900 トンだったため、1 億 1,700 万円が浮いた計算になる。

112　前田久吉（1959）『東京タワー物語』東京書房、p13

113　首都圏においては、当初 NHK 教育が 1ch、NHK 総合が 3ch だったが、1960（昭和 35）年 11 月に総合が 1ch、教育が 3ch に入れ替わった。

114　松尾三郎（1959）「東京タワー建設について（其の一）昭和 34 年 2 月 18 日　関東支部講演」『送電線建設資料』第 5 集、送電線建設技術研究会、p320

115　大河原春雄（1992）『物語 東京の都市計画と建築行政』鹿島出版会、p102-104

116　滝谷由亀・堀川潭編（1974）『歴代郵政大臣回顧録』第 3 巻、通信研究会、p14-15，p20-21

117　戦前、東京の建築行政は警視庁が所管していた。

118　石井桂（1961）『建築のお巡りさん』建設綜合資料社、p126-127

119　毎日新聞 1958 年 4 月 2 日朝刊「時代遅れ「羽田空港」国際航空運送協会　施設の改善申入れ」
朝日新聞 1958 年 4 月 2 日朝刊「新テレビ塔は〝邪魔物〟各国航空会社代表が指摘」

120　毎日新聞 1958 年 7 月 20 日夕刊「世界一のテレビ塔　年内完成へ建設進む　台風、地震も大丈夫　またふえる東京新名所」

121　松尾三郎（1958）「東京タワーの建設について」『電気通信』12 月号、電気通信協会、p15

122　正力松太郎（1959）「カラー時代来たる　東京タワーに参加せぬ！」『日本テレビ放送網社報』1 月 25 日号、日本テレビ放送網、p3

123　日本テレビ放送網編（1978）『大衆とともに 25 年：沿革史』日本テレビ放送網、p113

124　分部芳雄（1982）「アンテナ物語り」『TBS 放送事はじめ：有楽町から赤坂へ』東京放送旧友会発行、p57-58

125　今道潤三（1974）「テレビ二十年：民放界の重鎮が語るテレビ時代の内幕（第一回）」『財界』2 月 15 日号、財界研究所、p105

126　今道潤三・久住悌三・前田義徳・十返肇（1958）「座談会テレビ塔の風あたり：編集局長の言い分」『中央公論』4 月号、中央公論社、p90（今道潤三の発言）

127　岡邦行（1984）『長嶋茂雄をつくった男：昭和 34 年 6 月 25 日天覧試合陰のヒーロー』三一書房、p37

第２章　屋根付き球場計画：正力ドーム

1　週刊ベースボール 1959 年 4 月 22 日号「蔭で働く人々　後楽園・入場整理主任　清水達司」ベースボール・マガジン社、p70
2　井上登・鈴木惣太郎・三宅大輔・鈴木竜二・大和球士・関三穂（1968）「多難だった球場づくり：この人は証言する戦後 20 年プロ野球裏面史」『週刊ベースボール』2 月 12 日号、ベースボール・マガジン社、p80（鈴木龍二の発言）
3　ベースボールニュース 1947 年 10 月 10 日号「日本野球国際スタジアムの構想」日本体育週報社、p6-7
　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p260
4　住宅営団は、関東大震災後に内務省によって設立された同潤会の後身の組織。同潤会は関東大震災後に住宅供給を担い、青山アパート、代官山アパート、江戸川アパート等の鉄筋コンクリート造の不燃住宅を建設した。
5　朝日新聞 1947 年 9 月 3 日朝刊「球場建設に住民反対」
6　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p261
7　井上登・鈴木惣太郎・三宅大輔・鈴木竜二・大和球士・関三穂（1968）「多難だった球場づくり：この人は証言する戦後 20 年プロ野球裏面史」『週刊ベースボール』2 月 12 日号、ベースボール・マガジン社、p80（鈴木龍二の発言）
8　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p260
9　石井桂（1991）「戸山ハイツ建設の思い出」『石井桂と共に』石井桂建築研究所、p90-92
10　清水達司伝刊行委員会編集係編（1978）『裏方ひとすじ：清水達司伝』清水達司伝刊行委員会、p150
11　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p262
12　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p263
13　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p261-262
14　朝日新聞 1949 年 8 月 5 日朝刊「もめる不忍池　埋立三計画に地元反対」
　恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史』東京都、p232
15　読売新聞 1949 年 8 月 5 日朝刊「上野不忍池の争奪三巴戦」
16　台東区編（1998）『台東区史：行政編』台東区、p29
17　不忍池は明治期に競馬場として利用されたことがあった。
18　恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史』東京都、p231
19　サトウハチロー（1949）「ハチロー球談義 No.18　球場の話」『ベースボールニュース』第 637 号、日本体育週報社、p35
20　公聴会での小林孝一国際野球場建設委員会副委員長の説明（東京都議会議会局法制部編（1956）『東京都議会史』第 2 巻下、東京都議会議会局、p1145）
21　朝日新聞 1949 年 8 月 5 日朝刊「もめる不忍池　埋立三計画に地元反対」
22　恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史』東京都、p232-233

23　毎日新聞 1949 年 8 月 7 日朝刊「投書　不忍池の埋立（岸田日出刀）」
24　安井誠一郎（1960）『東京私記』都政人協会、p50
25　朝日新聞 1949 年 8 月 9 日「声　埋立に反対（石原憲治）」
26　サトウハチロー（1949）「ハチロー球談義 No.18　球場の話」『ベースボールニュース』第 637 号、日本体育週報社、p35
27　東京タイムズ 1949 年 8 月 12 日「みたりきいたりためしたり」（東京都建設局公園観光課（1949）「上野公園不忍池埋立につき言論関係資料一覧」『公園緑地』第 11 巻第 4 号、日本公園緑地協会、p26）
28　石川栄耀（1952）「私の都市計画史（終）」『新都市』第 6 巻第 12 号、都市計画協会、p9
29　恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史』東京都、p233
30　読売新聞 1949 年 11 月 9 日朝刊「オドウール球場と命名　不忍池野球場　結局は実現の機運」
31　東京都議会議会局法制部編（1956）『東京都議会史』第 2 巻下、東京都議会議会局、p1142-1163
32　サン写真新聞 1949 年 8 月 18 日「紙上討論会」（東京都建設局公園観光課（1949）「上野公園不忍池埋立につき言論関係資料一覧」『公園緑地』第 11 巻第 4 号、日本公園緑地協会、p28）
33　読売新聞 1949 年 8 月 13 日朝刊「いずみ」
34　朝日新聞 1949 年 12 月 27 日朝刊「不忍池は埋立てぬ　球場は北側の敷地に」
35　東京都庁議資料「不忍池埋立について」（1950 年 1 月 10 日）
36　朝日新聞 1949 年 8 月 5 日朝刊「もめる不忍池　埋立三計画に地元反対」
37　「不忍池弁天の北側の池および遊歩道約二万坪に水族館、児童遊園地を設けるほか、池中に百坪の島を二、三ヶ所作って水鳥類を放し飼いする計画」（朝日新聞 1949 年 8 月 5 日朝刊「もめる不忍池埋立三計画に地元反対」）
38　恩賜上野動物園編（1982）『上野動物園百年史』東京都、p234
39　東京都庁議資料「不忍池埋立について」（1950 年 1 月 10 日）
40　毎日新聞 1950 年 3 月 7 日朝刊「埋めずに北側野球場　不忍池問題　都議会の態度本極り　だが残る地元の猛反対」
41　読売新聞 1950 年 4 月 3 日夕刊「上野の春　動物園は憂鬱　東照宮が〝旧境内還せ〟球場は立消えたが……拡張縮小か」
42　1,100 万円以上の財産には 85％の税率がかけられた。
43　徳川家正と市岡忠男の間で交わされた仮契約書（1950 年 4 月 15 日付）と覚書（1950 年 8 月 1 日付）が残されている。
44　大西健夫（2006）「プリンスホテルの生成」『堤康次郎と西武グループの形成』知泉書館、p236
45　土地の所有権を巡り増上寺と争いになる。また、ホテルの工事に着手する直前には、市民から反対運動が起こっていた。
46　鈴木龍二（1980）『鈴木龍二回顧録』ベースボール・マガジン社、p257
47　言上書は「国際スタヂアム建設期成会」の名義で、市岡忠男（発起人代表）、飯田勲、市岡乙熊、立石方亮、清家武夫、西尾精容の 6 名の氏名も記されている。

48　針木康雄（1987）『経営の神髄第７巻　熱情の堅実経営　堤義明』講談社、p29

49　堤康次郎による皇室の土地買収とプリンスホテル建設の経緯については『ミカドの肖像』（猪瀬直樹）に詳しい。

50　タイプ印刷の言上書の最終ページには、「右の主旨に依る土地払下げに賛同し総裁を受諾す　昭和二十八年九月十八日　東久邇稔彦」の署名とともに押印がある。

51　第 38 回国会参議院内閣委員会第 16 号 1961 年 4 月 6 日（瓜生順良宮内庁次長の発言）

52　京浜急行電鉄株式会社社史編集班編（1980）『京浜急行八十年史』京浜急行電鉄、p211

53　デイリースポーツ 1955 年 3 月 1 日「布石にすぎぬ新宿球場　敷地難でゆき悩む　現状は〝永田構想〟の域出ず」

54　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p263

55　『新宿スタヂアム設立計画概要書』1955 年頃（野球殿堂博物館野口務旧蔵資料）

56　当時、都心のアイススケートリンクとしては、芝公園 13 号地の日活スポーツセンター（1949 年）と後楽園アイスパレス（1951 年）が知られていた。日活スポーツセンターは 1955（昭和 30）年 6 月に閉鎖し、1957（昭和 32）年に高級高層アパートである日活アパートが建設された。なお、球場内のアイススケートリンクとしては、1962（昭和 37）年に完成した南千住の東京スタジアムに設置されることになる。

57　デイリースポーツ 1955 年 3 月 15 日「また二つ都心球場案　秘かに進む永田・大川両案　農相一役買う・永田案　費用は熊谷組・大川案」

58　昭和初期に佐々木芳朗が個人で経営する会社として創業され、1943（昭和 18）年に法人化。戦中は中国、朝鮮等でも事業を展開した。満州時代から鮎川のもとで不動産事業に従事し、戦後、財閥解体に伴って日産の系列を離れた（旗手勲（1992）『土地投資と不動産・水資源』日本経済評論社、p170）

59　『新宿スタジアム設立計画』1956 年 2 月 22 日（野球殿堂博物館図書室野口務旧蔵資料）の中に、帝国石油の土地を巡る経緯が記されている。

60　不忍池の計画が挫折した理由は、土地の取得ができなかったこともあるが、正力の反対も少なからず影響していた（電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p262）。また、次のようなエピソードもある。正力の元を訪れた上野観光連盟の秋葉順蔵会長ら 3 名が不忍池埋立反対を訴えると、じっと黙って聞いていた正力は「よしわかった」と鈴木龍二セ・リーグ会長に電話をかけ、「君、不忍池の野球場は止めたまえ、地元が反対しとるよ」とだけ伝えたという（上野繁昌史編纂委員会（1963）『上野繁昌史』上野観光連盟、p255-256）。

61　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p265

62　野球殿堂博物館図書室野口務旧蔵資料にあるタイプ版の「第七章　戦後の球場建設と新宿コロシアム」11 枚目。この資料は『野球と正力』の再版のために野口務が執筆した草稿だが、実際には使われなかった。なお、この原稿の大半は『後楽園社史 野球篇 資料集』の「戦後続出した〝球場〟建設計画」の項に反映されている。

63　黒崎貞治郎（1975）『藍より蒼き』21 世紀出版の会、p240

64　黒崎貞治郎（1975）『藍より蒼き』21 世紀出版の会、p240-241

65　電通編（1962）『後楽園社史 野球篇 資料集』、p265

66　東京新聞 1956 年 5 月 9 日朝刊「新宿にプロ球場実現　後楽園凌ぐ諸施設　東京スタジアム　六月中に着工の運び」

67　星野と鮎川は、1935（昭和 10）年春に満州で会って以来の仲であり、二人は満洲 5 ヵ年計画の立案に携わり、鮎川は満洲重工業開発総裁に就任した。結局、頓挫したものの、官民の協働による満洲の開発計画の骨格は鮎川と星野がつくったものだった。

68　鮎川義介（1964）『百味箪笥：鮎川義介随筆集』愛蔵本刊行会、p202

69　サトウハチロー（1947）『サトウハチロー随筆集：昨日も今日も明日も』草原書房、p6-7

70　星野芳樹（1986）『星野芳樹自伝：静岡からナイロビへ』リブロポート、p22

71　小坂正則（1997）『もう一つの昭和史・男たちの靴音　私の異色人脈簿（尚友ブックレット No.8）』尚友倶楽部、p79

72　黒崎貞治郎（1975）『藍より蒼き』21 世紀出版の会、p254-255
読売新聞 1952 年 3 月 27 日夕刊「巣鴨の戦犯慰問　巨人毎日二軍戦」

73　星野顧問室（1956）『A 野球スタジアム興業計画概要』と株式会社久米建築事務所（1956）『A 野球スタジアム計画案』の二つの資料は、東京都公文書館内田祥三文庫と野球殿堂博物館図書室に残されている。野球殿堂博物館所蔵の青焼き図面については、綱島理友（2001）「四十数年前に屋根つき球場建設計画があった！」『ベースボール・マガジン』夏季号、ベースボール・マガジン社、p70-73 でも取り上げられている。

74　日本カラーテレビ放送協会の申請書には、カラー放送だけでなく、有料テレビ放送、番組審議会（均衡番組編成）などの先進的な試みも盛り込まれていた。

75　『日本カラーテレビ放送協会　東京、大阪、名古屋及び福岡放送局申請書要旨』（国立国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）

76　社団法人日本カラーテレビ放送協会創立事務所（1956）『天然色テレビジョン放送計画概要』（国立国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）

77　山一証券ニューヨーク支店の新井米男がヒルトンを鮎川に仲介していた（鮎川義介（1956）「日本を繁栄にするだろう　世界的なヒルトンの国際ホテル」『実業の世界』4 月号、実業之世界社、p26-27,『東京ヒルトンホテル』（国立国会図書館憲政資料館鮎川義介関係文書））

78　小坂正則（1997）『もう一つの昭和史・男たちの靴音　私の異色人脈簿（尚友ブックレット No.8）』尚友倶楽部、p90

79　小坂正則（1997）『もう一つの昭和史・男たちの靴音　私の異色人脈簿（尚友ブックレット No.8）』尚友倶楽部、p78-79

80　星野芳樹（1986）『星野芳樹自伝：静岡からナイロビへ』リブロポート、p26

81　星野芳樹（1986）『星野芳樹自伝：静岡からナイロビへ』リブロポート、p29

82　報知新聞 1958 年 6 月 13 日『野球に新時代が来る　屋根つき球場・計画者星野直樹氏の喜び　〝高さ〟で一苦労　弾道学者に研究を依頼　正力さんの〝力〟どうしても必要だった』

83　丸山勝久（1967）『東京ヒルトン・ホテルの企画と建設（第２版）』私家版、p9
84　富田昭次（1996）『東京ヒルトンホテル物語』オータパブリケイションズ、p38
85　丸山勝久（1967）『東京ヒルトン・ホテルの企画と建設（第２版）』私家版、p30
86　東京急行電鉄株式会社企画部（1956）『東京に何故ヒルトン・ホテルが必要か？』（国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
87　星野顧問室（1957）『野球場建設計画に関する基礎調査中間報告書』（国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
88　星野顧問室（1957）『野球場建設計画に関する基礎調査中間報告書』（国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）、まえがき
89　市川玲子氏への聞き取り（2023 年 6 月 7 日）
90　星野顧問室（1957）『野球場建設計画に関する基礎調査中間報告書』（国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）、p140
91　天文博物館五島プラネタリウム編（2001）『五島プラネタリウム 44 年のあゆみ』、p11（山本忍の発言）
92　天文博物館五島プラネタリウム編（2001）『五島プラネタリウム 44 年のあゆみ』、p15（村山定男の発言）
93　市川玲子氏への聞き取り（2023 年 6 月 7 日）
94　天文博物館五島プラネタリウム編（2001）『五島プラネタリウム 44 年のあゆみ』、p13（村山定男の発言）
95　東京都建築審査会（1955 年 10 月 11 日開催）に東急電鉄が提出した理由書（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）
96　丸山勝久（1970）「生きる」『在家佛教』5 月号、在家仏教協会、p45-55
97　丸山勝久（1956）『本邦映画産業とテレビ放送業の将来』（国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
98　丸山勝久（1956）『本邦映画産業とテレビ放送業の将来』、同（1956）『米国におけるテレビの発達と日本のテレビの将来』（ともに国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
99　『東京ヒルトン・ホテル』（国立国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
鮎川義介（1956）「日本を繁栄にするだろう　世界的なヒルトンの国際ホテル」『実業の世界』4 月号、実業之世界社、p26-27
100　新井米男から鮎川義介宛書簡（国立国会図書館憲政資料室鮎川義介関係文書）
101　鮎川が中政連に寄付した金額と時期は以下のとおり。1955（昭和 30）年 12 月に 1,000 万円、1956（昭和 31）年 5 月 14 日に 1 億 9,000 万円、同年 5 月 24 日に 5,000 万円、7 月に 3 億円、1957（昭和 32）年 11 月に 1 億円（日本中小企業政治連盟編（1966）『中政連運動十年史』日本中小企業政治連盟、p39-44）
102　東京新聞 1958 年 6 月 10 日朝刊「新宿に〝屋根つき球場〟　世界で初めて、35 年春に完成　「両国国技館」の五倍」

103　NTV 社報 7 号 8 号合併号 1958 年 8 月 25 日「世界一のスポーツ大殿堂について　正力会長社員に訓示」
104　NTV 社報 7 号 8 号合併号 1958 年 8 月 25 日「世界一のスポーツ大殿堂について　正力会長社員に訓示」
105　NTV 社報 7 号 8 号合併号 1958 年 8 月 25 日「世界一のスポーツ大殿堂について　正力会長社員に訓示」
106　小林與三次（1973）「奥村さんと正力会長」『追悼奥村綱雄』野村證券追悼奥村綱雄編集委員会、p215
107　前田利為侯伝記編纂委員会編（1986）『前田利為』前田利為侯伝記編纂委員会、p42-43
108　前田利為侯伝記編纂委員会編（1986）『前田利為』前田利為侯伝記編纂委員会、p280
109　前田利為侯伝記編纂委員会編（1986）『前田利為』前田利為侯伝記編纂委員会、p285
110　加賀乙彦・川本三郎（1998）「永遠の都、東京。」『東京人』2 月号、都市出版、p98
加賀乙彦（2013）『加賀乙彦自伝』ホーム社、p27
加賀乙彦（1997）『永遠の都　1』新潮文庫、p334-335
111　帝国石油社史編さん委員会（1992）『帝国石油五十年史：経営編』帝国石油株式会社、p41
112　日本国憲法第 14 条第 2 項で「華族その他の貴族の制度は、これを認めない」と規定された。
113　帝国石油社史編さん委員会（1992）『帝国石油五十年史：経営編』帝国石油株式会社、p41
114　大宅壮一（1981）「帝国石油　起死回生の天然ガス」『大宅壮一全集』第 10 巻、蒼洋社、p249（初出は週刊朝日 1958 年 3 月 2 日号）
115　酒井美意子（1986）『ある華族の昭和史：上流社会の明暗を見た女の記録』講談社文庫、p240
116　東京新聞 1958 年 6 月 10 日朝刊「新宿に〝屋根つき球場〞　世界で初めて、35 年春に完成　「両国国技館」の五倍」
読売新聞 1958 年 6 月 11 日朝刊「世界初の〝夢の球場〞　屋根つきで新宿に　明後年には出来あがる」
スポーツニッポン 1958 年 6 月 10 日「新宿に屋根つき球場　地下にはカラーテレビスタジオ　NTV が資金 60 億で計画」
デイリー1958 年 6 月 11 日「世界で初の〝屋根つき球場〞　NTV が発表　35 年開幕まで完成　来春着工　四、五十億円で新宿へ」
日刊スポーツ 1958 年 6 月 11 日「新宿に大屋内球場　工費 50 億、収容八万　NTV 出資で 35 年春完成」
東京中日新聞 1958 年 6 月 11 日「新宿に屋根つき球場　明後年春には完工　八万人の収容力」
報知新聞 1958 年 6 月 11 日「雨が降っても野球ができる　新宿に屋根つき球場　収容人員八万五千、暖冷房も完備　NTV が計画・明後年完成」など。
117　国立競技場は 1958（昭和 33）年に開催されたアジア大会のメインスタジアムとして建設され、1964（昭和 39）年の東京オリンピックに向けてスタンドが増設された。
118　黒崎貞治郎（1975）『藍より蒼き』21 世紀出版の会、p256
119　黒崎貞治郎（1975）『藍より蒼き』21 世紀出版の会、p256

120　東京中日新聞 1958 年 6 月 13 日「上野の新球場も屋根つき　明後年完成めざす　新宿と期せずして競争　総工費は三十四億円」

121　瀬戸川実（1982）「プロレス始末記」『TBS 放送事はじめ：有楽町から赤坂へ』東京放送旧友会発行、p313-316
流智美（2014）「知っているようで知らない力道山時代の放映実態」『日本プロレス事件史』Vol.2、ベースボール・マガジン社、p38

122　実業之日本社編（1958）「プロ野球界の地図は変るか？二つの新球場建設の動き」『実業之日本』8 月号、実業之日本社、p54-55

123　東京中日新聞 1958 年 6 月 13 日「上野の新球場も屋根つき　明後年完成めざす　新宿と期せずして競争　総工費は三十四億円」

124　東京中日新聞 1958 年 6 月 13 日「上野の新球場も屋根つき　明後年完成めざす　新宿と期せずして競争　総工費は三十四億円」

125　スポーツニッポン 1958 年 6 月 21 日「果して出来るか夢の球場」

126　司法研修所、書記官研修所、調査官研修所、寮の建物を別の土地に建設することとされた（第 31 回国会参議院予算委員会第 12 号 1959 年 3 月 17 日栗本一夫最高裁長官代理者の発言）

127　第 31 回国会参議院予算委員会第 12 号 1959 年 3 月 17 日（平林剛委員の発言）

128　日刊スポーツ 1958 年 6 月 11 日「新宿に大屋内球場　工費 50 億、収容八万　NTV 出資で 35 年春完成」

129　アサヒグラフ 1958 年 9 月 7 日号「国産で腕くらべ〝屋根つき球場〟」朝日新聞社、p32-33
彰国社編（1958）「屋根つき球場：大成建設・久米建築事務所共同設計案」『建築文化』11 月号、彰国社、p59-60

130　鈴木惣太郎日記 1958 年 8 月 13 日付

131　地上 6 階建で建設された鉄道会館は、1968（昭和 43）年に当初計画の地上 12 階建に増築された。

132　スポーツニッポン 1958 年 6 月 21 日「果して出来るか夢の球場」

133　読売新聞 1958 年 9 月 4 日朝刊「さらに設計案ねる　夢の球場建設顧問会議開く」

134　鈴木惚太郎日記 1958 年 8 月 20 日付「正力さんの考が変ってきて、淀橋水道貯水地に眼をそそいでいる。」

135　東京中日新聞 1958 年 12 月 31 日「屋根つき球場、具体化へ　敷地、淀橋浄水場に　「帝石跡」の予定を変更」

136　石井桂（1961）『建築のお巡りさん』建設綜合資料社、p136

137　鈴木惣太郎日記 1958 年 7 月 28 日付「日本テレヴィへ行き三時に清水社長に会い、オマリーの二十二日附手紙を提示して私の意見を述べた。清水社長には何の定見もなし。万事正力さんの指し図通りである」

138　1958（昭和 33）年 9 月 26 日の顧問会議での内田祥三の発言「浄水場跡を高層建築で埋めるとすれば現在の計画にある程度の green は絶対必要でこれをつぶすことはもっての外である」（顧問会議資料に内田が自身の発言内容を記したメモ）

139　1958（昭和 33）年 7 月 29 日、日本テレビは読売会館で灘尾弘吉文部大臣をはじめ、文部省、体育協会関係者を招いて説明会を開いている（文部大臣のほか、稲田清助文部次官、清水康平文部省体育局長、久富国立競技場運営委員会会長、東龍太郎体協会長、田畑政治体協専務理事、川本体協参与が参加)。説明側として正力自らが出席し、「屋根がある球場で、一年三百六十五日フルに使えるからスポーツ界の革命になると思うが、完成後は野球だけでなく、日本のスポーツ界に貢献する意味でいろいろなスポーツをやりたい。また小、中学生向きの映画劇場にも使いたいと考えているが、美しくて安くみせる〝スポーツと娯楽の殿堂〞としたい」と方針を語っていた（読売新聞 1958 年 7 月 30 日朝刊「“スポーツと娯楽の殿堂”に　「屋根つき球場」の説明会」)。この説明会は、正力のブレーンである野口務の旧制四高時代の同級生で、当時文部省体育局長に就任したばかりの清水康平を通じてセッティングされた。同時期、清水と野口は翌年 6 月に実施される天覧試合に向けて頻繁に連絡を取り合っており、極秘で開催の準備が進められていた。

140　サン写真新聞 1949 年 8 月 18 日「紙上討論会」（東京都建設局公園観光課（1949)「上野公園不忍池埋立につき言論関係資料一覧」『公園緑地』第 11 巻第 4 号、日本公園緑地協会、p28）

141　正力松太郎日本テレビ会長が東龍太郎東京都知事に提出した申請書 1959 年 8 月 5 日付（東京都公文書館所蔵資料）

142　鈴木惣太郎日記 1960 年 7 月 1 日付

143　柴田秀利は、オマリーより聴取した内容（11 項目）をまとめた資料を顧問会議に提出している（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

144　内田祥三が顧問会議資料に記録したメモによると、フラーについては、早い段階から顧問会議でも名前が挙がっていた。1958（昭和 33）年 10 月の会議では、内田祥三がフラーの文献を 7 冊持参し、勉強したい人がいれば貸すと発言している。また、正力が海外に人を派遣して研究してはどうかと述べたのに対し、内田は「フラーが今度何かやる場合には構造については日本人に協力してもらいたいと言っていたくらいなので、内藤多仲、武藤清を信頼してもよいのではないか」と述べ、それ以来フラーの話題は出ていなかった。

145　ウォルター・オマリーから正力松太郎宛書簡 1960 年 7 月 13 日付（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

146　読売新聞 1958 年 6 月 28 日朝刊「ブームに伴う大革命　〝円家屋球場〞を語る　鈴木惣太郎」

147　オマリーによる初期の屋根付き球場の検討経緯は、下記文献が詳しい。Benjamin D. Lisle, Modern Coliseum: Stadiums and American Culture, University of Pennsylvania Press, 2017, pp.41-58

148　ウォルター・オマリーからバックミンスター・フラー宛書簡（1955 年 5 月 26 日)。ウォルター・オマリーのホームページ（walteromalley.com）で書簡のコピーが閲覧可能。

149　Benjamin D. Lisle, Modern Coliseum: Stadiums and American Culture, University of Pennsylvania Press, 2017, p.74

150　Michael Shapiro, The Last Good Season: Brooklyn, The Dodgers, and Their Final Pennant Race Together, Broadway, 2004, p.17

151　Benjamin D. Lisle, Modern Coliseum: Stadiums and American Culture, University of Pennsylvania Press, 2017, p.75

152　Michael Shapiro, The Last Good Season: Brooklyn, The Dodgers, and Their Final Pennant Race Together, Broadway, 2004, p.19

153　Michael Shapiro, The Last Good Season: Brooklyn, The Dodgers, and Their Final Pennant Race Together, Broadway, 2004, p.18

154　Frank Tinsley, A Dome Grows in Brooklyn, Mechanix Illustrated, July, 1956

155　読売新聞 1958 年 6 月 28 日朝刊「ブームに伴う大革命　〝円家屋球場〟を語る　鈴木惣太郎」

156　Benjamin D. Lisle, Modern Coliseum: Stadiums and American Culture, University of Pennsylvania Press, 2017, pp.76-77

157　Andy McCue, Mover and Shaker: Walter O'Malley, the Dodgers, & Baseball's Westward Expansion, University of Nebraska Press, 2014, p.136

158　Benjamin D. Lisle, Modern Coliseum: Stadiums and American Culture, University of Pennsylvania Press, 2017, p.77

159　アメリカ滞在中の鈴木が日本テレビに送った 5 通分の報告。1960（昭和 35）年 10 月 27 日の顧問会議に「鈴木惣太郎氏よりの通信」として提出された（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

160　鈴木惣太郎日記 1960 年 3 月 16 日付「二年半も屋根つき球場の調査研究に手をつくしたのでアメリカ側のエンジニアーに贈るロイアルティーその他莫大の謝礼は出来ないという点を明にした」

161　フラーが面会場所として MoMA を指定した理由は、フラーが設計したオクテットトラス（正八面体と正四面体を組み合わせた形態）のドームの模型を見せるためだったという。MoMA では、1959 年 9 月から翌年 3 月にかけて Three Structures by Buckminster Fuller と題する展覧会が開催されていた。

162　読売新聞 1961 年 2 月 2 日朝刊「建築界の未来を描く　フーラー博士特別講演会」

163　週刊読売 1961 年 2 月 12 日号「〝建築界の鬼才〟フーラー博士の素顔」
週刊読売 1961 年 2 月 26 日号「未来をつくる人　フーラー博士」

164　この頃のマスメディアでは「フラー」ではなく「フーラー」と表記されることが多かった。

165　読売新聞 1961 年 3 月 1 日朝刊「〝日本の印象〟フーラー博士が語る」

166　貞尾昭二（1990）「柴田さんのこと、フラー博士のこと」『炎のごとく　水のごとく：次代に賭けた柴田秀利遺稿集』「柴田秀利遺稿集」刊行会、p358

167　石井桂（1961）『建築のお巡りさん』建設綜合資料社、p137-138

168　鈴木悦郎（1990）「南日さんへの追憶」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p125

169　鈴木惣太郎日記 1961 年 5 月 30 日付「フラー氏は大成の鈴木君を大にほめた。正力さん　鈴木君の見方をかえた。鈴木君よろこぶ。」

170　毎日新聞 1961 年 6 月 11 日朝刊「南千住につくる　大毎球場工費 20 億円、来月に着工」

171　山下重定（1972）『大いなる終焉：永田雅一の華麗なる興亡』日藝出版、p227

172　内藤多仲も東京スタジアムの誕生によって新宿球場が実現に至らなかったとの認識を示している（内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p20）。

第３章　正力タワーと NHK タワー

1　バックミンスター・フラー（2007）『クリティカル・パス：宇宙船地球号のデザインサイエンス革命』白揚社、p505
2　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p21
3　バックミンスター・フラー（2007）『クリティカル・パス：宇宙船地球号のデザインサイエンス革命』白揚社、p505
4　日本テレビ放送網株式会社新テレビ塔建設委員会建設部（1968）『550mテレビ塔設計に関する考察』（早稲田大学内藤多仲博士記念館所蔵資料）
5　Shoji Sadao, Buckminster Fuller and Isamu Noguchi: Best of Friends, 5 Continents Editions, 2011, p.187
6　Buckminster Fuller , World Man, Princeton Architectural Press, 2013, p.40
7　読売新聞 1966 年 8 月 5 日夕刊「フーラー博士　富士登山」
8　新聞之新聞 1985 年 5 月 22 日「メディア回遊記第 205 回　正力タワーの構想（柴田秀利）」
9　新聞之新聞 1985 年 5 月 22 日「メディア回遊記第 205 回　正力タワーの構想（柴田秀利）」
10　バックミンスター・フラー（2007）『クリティカル・パス：宇宙船地球号のデザインサイエンス革命』白揚社、p505
マーティン・ポーリー（1994）『バックミンスター・フラー』鹿島出版会，p193-195
The World of Buckminster Fuller, Architectural Forum, January-February 1972, p.88
11　日本では前年の 1955（昭和 30）年に原子力基本法が成立。日本の原子力導入には正力松太郎は原子力担当大臣として関わり、のちに原子力委員会の初代委員長となる。
12　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p21
13　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p21
14　内藤多仲によるメモ（早稲田大学内藤多仲博士記念館所蔵資料）
15　Shoji Sadao, Buckminster Fuller and Isamu Noguchi: Best of Friends, 5 Continents Editions, 2011, p.187
16　Shoji Sadao, Buckminster Fuller and Isamu Noguchi: Best of Friends, 5 Continents Editions, 2011, pp.187-189
The World of Buckminster Fuller, Architectural Forum, January-February 1972, p.92
17　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p21
18　Sadao, Shoji, Buckminster Fuller and Isamu Noguchi: Best of Friends, 5 Continents Editions, 2011, p.188
バックミンスター・フラー（2007）『クリティカル・パス：宇宙船地球号のデザインサイエンス革命』白揚社、p498-499
マーティン・ポーリー（1994）『バックミンスター・フラー』鹿島出版会、p189-192
19　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p20-21

20　読売新聞 1968 年 5 月 11 日朝刊「世界一のテレビ塔を建設　日本テレビ　新宿に五五〇メートル今秋着工　高層ビルも含めて」
21　1971（昭和 46）年 4 月、最初期の超高層住宅である地上 19 階建・2 棟の三田綱町パークマンションが完成する。
22　実業界 1968 年 6 月 15 日号「世界一のテレビ塔を建設　日本テレビ　―今秋着工、明年中に完成―」実業界、p19
23　読売新聞 1968 年 5 月 11 日朝刊「世界一のテレビ塔を建設　日本テレビ　新宿に五五〇メートル今秋着工　高層ビルも含めて」
24　佐伯昭行（1990）「懐かしき時代と完成を信じたタワー」『今も　いつも・幼い子どもたちのために－南日恒夫追悼集―』、p91
25　日刊建設工業新聞 1968 年 5 月 13 日「新宿に〝世界一のテレビ塔〟　今秋にも着工へ　日本テレビ三社の計画書を検討」
26　電波新聞 1968 年 5 月 16 日「NTV テレビ塔建設具体化へ　初の準備委開く」
27　1963（昭和 38）年の建築基準法改正で容積地区制度が創設され、区域内では絶対高さ制限が適用除外されることとなった。東京では 1964（昭和 39）年 10 月に環状六号線と荒川放水路の内側で指定、翌年 1 月に施行された。
28　青木貞伸（1975）「実録・マスコミ秘話②〝幻のタワー計画〟騒動劇」『マスコミ評論』8 月号、マスコミ評論社、p49
29　南日恒夫（1968）「世界一のテレビ塔建設」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p120
30　鹿島建設株式会社設計部構造四課（1965）『N.T.V タワービルディングの静動的計算の研究』（1965 年 4 月 9 日）
31　武藤清・内田一義・高瀬啓元（1966）「偏微分方程式による塔状構造物の地震応答解析」『日本建築学会論文報告集』第 129 号、日本建築学会、p10-14
32　南日恒夫（1968）「世界一のテレビ塔建設」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p120
33　田中角栄（1968）「先覚者正力さんの卓見」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p7
34　本田靖春（2007）『我、拗ね者として生涯を閉ず』下巻、講談社文庫、p307-308
35　朝日新聞 1967 年 9 月 22 日夕刊「五百メートルを越すテレビ塔計画　日本テレビ」
36　「読売テレビ［正しくは日本テレビ］からは非公式に二、三年前に、まだＶからＵへの転換がきまらなかった前のことでございますが、郵政省に対して大きなタワーを建てたい、こういうお話があったようでございますが、その当時はまだその必要はない、こういうふうに郵政省は判断をいたしまして、その旨、返事をしておるはずでございます」（第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日河本敏夫郵政相の発言）
37　電波新聞 1968 年 7 月 22 日「ブラウン管の内側（34）：NTV の内情　映像改善と経営強化　真剣な首脳部の建設計画　新タワーのメリット」

38　各局の足並みが揃わなかった東京を反面教師として名古屋では、集約電波塔である名古屋テレビ塔が建設された（神野金之助（1954）「名古屋テレビ塔が出来るまで」『一九五〇年代の人物風景第 3 部』人物展望社、p75）。

39　電波新聞 1968 年 5 月 13 日「批判よそに世界一のテレビ塔　建設にのりだす NTV　〝高さのみを誇らず　難視聴唯一の解決策〟NTV の弁」

40　末永富康（1999）「芝放送所回顧録」『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p222

41　青木貞伸（1975）「実録・マスコミ秘話②〝幻のタワー計画〟騒動劇」『マスコミ評論』8 月号、マスコミ評論社、p46

42　「覚え書のおもな内容は、①日本テレビを甲とし三菱関係各社のグループを乙とし、甲が計画するテレビ塔建設に関し取り決める②甲は計画を具体化するにあたり乙に一切をまかせる③設計計画の内容はテレビ塔（五百五十メートル、展望台を含む）および脚下にビルディングを建設する④乙はグループ内の関係各社の総合的なまとめを三菱商事とする」（電波新聞 1968 年 7 月 18 日「早ければ今秋に着工　NTV の新テレビ塔　〝他局の参加は歓迎〟」）

43　針木康雄（1968）「世界一〝正力タワー〟への風当り」『財界』9 月 1 日号、財界研究所、p12

44　針木康雄（1969）「実現性濃い正力タワーと受難の東京タワー」『財界』9 月 15 日号、財界研究所、p8

45　青木貞伸（1975）「実録・マスコミ秘話②〝幻のタワー計画〟騒動劇」『マスコミ評論』8 月号、マスコミ評論社、p46-52

46　毎日新聞 1967 年 1 月 3 日朝刊「まっ先にマンモス塔　四月には、参加申込み受付　会場づくり三月から」

47　毎日新聞 1967 年 4 月 9 日朝刊「万国博　基幹施設の最終設計案　中心の塔は四百メートル〝動く歩道〟を大動脈に」

48　朝日新聞 1967 年 4 月 15 日朝刊「会場計画がまとまる　あらたに屋根つき道路」

49　『日本万国博覧会公式記録　資料集別冊 B-5　常任理事会会議録 5 』(第 17 回常任理事会議事録 1967 年 4 月 21 日)、p12

50　『日本万国博覧会公式記録　資料集別冊 B-5　常任理事会会議録 5 』(第 17 回常任理事会議事録 1967 年 4 月 21 日)、p13

51　『日本万国博覧会公式記録　資料集別冊 B-5　常任理事会会議録 5 』(第 17 回常任理事会議事録 1967 年 4 月 21 日)、p19

52　日本経済新聞 1967 年 6 月 1 日朝刊「万国博シンボルタワー　三菱グループ、建設？」

53　日刊工業新聞 1967 年 6 月 11 日「三菱グループ、建設申入れ　万国博に 350 メートル回転展望塔」

54　三菱案の展望台の高さは、東京タワーの展望台とほぼ同じ。東京タワーの展望台は、もともと地上高 125mの大展望台一か所のみだったが、223mの位置にあった作業台を改修して、この年の 7 月から一般公開することが決まっていた。また、三菱案では回転式の展望台だった点が、東京タワーと異なる。日本では 1964（昭和 39）年に完成したホテルニューオータニ（高さ 72m）のスカイラウンジをはじめ、デパートやホテルの回転レストランが 1960 年代に流行していた。

55　Chad Randl, Revolving Architecture: A History of Buildings That Rotate, Swivel, and Pivot, Princeton Architectural Press, 2008, p.102

56　日本経済新聞 1967 年 7 月 16 日朝刊「万博「日本一の塔」は望み薄」
第 55 回国会参議院運輸輸委員会第 19 号 1967 年 7 月 13 日（澤雄次政府委員の発言）

57　朝日新聞 1967 年 7 月 15 日朝刊「展望塔建設は飛行機の邪魔　万博協会に運輸省申入れ」
日刊工業新聞 1967 年 7 月 19 日「運輸省、地元が難色　三菱の〝大展望塔〟めぐり」

58　週刊現代 1967 年 8 月 31 日号「石坂さん、万博は本当に大丈夫ですか」講談社、p33

59　日本テレビ放送網編（1968）「世界一のテレビ塔、「正力タワー」起工式」『日本テレビ』秋号、日本テレビ放送網、p6
読売新聞 1968 年 10 月 25 日朝刊「世界一のテレビ塔「正力タワー」起工式　各界から名士、盛大に」
朝日新聞 1968 年 10 月 24 日夕刊「完成すれば世界一です　新テレビ塔の起工式」
電波新聞 1968 年 10 月 25 日「世界一のテレビ塔起工式　日本テレビ」

60　週刊新潮 1968 年 11 月 2 日号「『正力タワー』と〝命名〟された新テレビ塔」新潮社、p21

61　日本テレビ放送網編（1968）「世界一のテレビ塔、「正力タワー」起工式」『日本テレビ』秋号、日本テレビ放送網、p6

62　電波新聞 1953 年 8 月 1 日「電波人百撰　大鉄塔を越える夢　真実と取ツ組む　正力松太郎氏」

63　読売新聞 1968 年 11 月 2 日朝刊「「正力タワー」懇談　正力社主とブリンクマン氏夫妻」

64　週刊サンケイ 1969 年 11 月 24 日号「空中分解するか？正力タワー：建築費、高さとも NHK に劣るテレビ塔合戦のゆくえ」産業経済新聞社、p135

65　「正力タワー」の商標登録は、石鹸類・はみがき・化粧品等、電気機械器具・電気通信機械器具等、家具・屋内外装置品・記念カップ等、おもちゃ・運動具等、文房具等、茶・コーヒー・清涼飲料・果実飲料等、菓子・パンに対して行われた（『文字商標集第 21 巻昭和 44 年公告』弁理士会、1970 年）。

66　南日恒夫（1968）「未来をつくる「正力タワー」」『日本テレビ』秋号、日本テレビ放送網、p10

67　小室紘和氏への聞き取り（2017 年 7 月 6 日）

68　南日恒夫（1968）「世界一のテレビ塔建設」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p117

69　日刊建設通信 1968 年 10 月 23 日「鉄塔大成、建築竹中へ　正力タワー基本構想を発表」
日刊建設工業新聞 1968 年 10 月 24 日「世界最高〝正力タワー〟きょう起工式　大成（タワー）竹中（付属建物）」

70　南日恒夫（1968）「未来をつくる「正力タワー」」『日本テレビ』秋号、日本テレビ放送網、p11

71　平成 17 年警察白書

72　モノレール計画は、1969（昭和 44）年度に「モノレールに関する調査研究会」が正式に発足し、1972（昭和 47）年度までの 4 ヵ年調査検討が行われた。その研究成果は、『モノレール開発計画報告書』（東京都首都整備局、1974 年）としてまとめられた。モノレール計画に触れた南日の文章は、研究会が発足する前年の 1968（昭和 43）年に書かれたものだが、この時点で基本的な構想ができていたと思われる。

73　財界展望新社編（1969）「レジャーの名門後楽園の二重苦：美濃部都政と正力構想？の挟撃」『財界展望』4 月号、財界展望新社、p49-50

74　週刊ベースボール 1969 年 10 月 6 日号「覆面記者座談会　ストーブリーグはもう始まっている」ベースボール・マガジン社、p39

75　ボーリング調査は三菱地所が企画し、株式会社応用地質調査事務所が実施した。9 ヵ所を対象に最大 100m の深度で調査が行われた。

76　石坂誠一（1990）「技術の先駆者南日恒夫君」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p280

77　平田純（1999）「南日恒太郎」『越中人譚』第 10 号、チューリップテレビ

78　産経新聞社編（2003）「私の写真館 103　女優村松英子」『正論』8 月号、産経新聞社、p18

79　井原高忠（2009）『元祖テレビ屋ゲバゲバ哲学』愛育社、p25-26

80　井原高忠（2009）『元祖テレビ屋ゲバゲバ哲学』愛育社、p117
南日英子編（1990）『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、口絵

81　村松剛（1990）「義弟を偲んで」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p313

82　エドワード・サイデンステッカー（2004）『流れゆく日々　サイデンステッカー自伝』時事通信出版局、p250-251

83　鈴木悦郎（1990）「南日さんへの追憶」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p125

84　村松剛（1990）「義弟を偲んで」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p313

85　南日は視察旅行の様子を広報誌に寄稿している（南日恒夫（1969）「世界の塔巡礼記」『日本テレビ』春号、日本テレビ放送網、p18-23）。また、南日が残した視察旅行のアルバムを見ると、アメリカ滞在時にバックミンスター・フラーを訪ねていたことがわかる。

86　横山悌次（1990）「南日さんの憶い出」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p133

87　内藤多仲（1968）「夢に生きる」『日本テレビ』夏号、日本テレビ放送網、p21

88　毎日新聞 1969 年 2 月 21 日夕刊「NHK が六五〇メートルのテレビ塔　代々木に UHF 用　百億円かけ　民放にも開放」
日刊建設通信 1969 年 2 月 22 日「650 メートルの放送タワー建設：45 年着工　UHF テレビ局に NHK」

89　NHK 内部文書「当面の諸問題について（1969 年 3 月 17 日、広報室長から各管理職宛）」に、タワー計画発表前に行われた政府及び自民党に対する根回しの経緯が記されている。「この構想については、先般郵政大臣が来局したおり、初めて説明し、大臣の意向を打診したが、大臣は基本的に賛成した。その後、自民党通信部会で 44 年度 NHK 予算を説明した際に、議員から放送センターの将来構想について質問が出たので説明をした。このときの話が、未熟なままに、さる 2 月 21 日の閣議後の記者会見で郵政大臣から発言されたものである。その後、2 月末から 3 月初めにかけて関係各方面の理解を得た」（テレビ放送アンテナ 50 年史編集委員会編（1989）『テレビ放送アンテナ 50 年史』、p554-557）

90　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（河本敏夫郵政相の発言）

91　電波新聞 1969 年 3 月 7 日「NHK600 メートルの世界一タワー　前田会長、構想を語る」

92　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（前田義徳 NHK 会長の発言）

93　志賀信夫（1977）「人物による放送史①　NHK 名誉顧問　前田義徳　テレビ時代の国際的立役者」『政界往来』11 月号、政界往来社、p120

94　蓮池正（1973）「NHK ホールの建築設計」『日本音響学会誌』9 月号、日本音響学会、p548

95　蓮池正「放送センター建設の回想談」『ろくじ会記録』No.50-1、1985 年 12 月 20 日、p10

96　蓮池正「放送センター建設の回想談」『ろくじ会記録』No.50-2、1985 年 12 月 20 日、p4

97　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（石川忠夫政府委員の発言）

98　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（左藤恵政府委員の発言）。左藤恵は、大阪万博で三菱グループが計画した 350ｍタワーに反対した左藤義詮大阪府知事の長男。郵政官僚出身の政治家で、のちに郵政大臣や法務大臣を歴任。

99　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（石川忠夫政府委員の発言）

100　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（野村達治 NHK 技師長の発言）

101　蓮池正「放送センター建設の回想談」『ろくじ会記録』No.50-2、1985 年 12 月 20 日、p4

102　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（前田義徳 NHK 会長の発言）。なお、2012（平成 24）年の地上デジタル移行までの 10 年間、VHF と UHF のサイマル放送が行われていた。

103　第 61 回参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（野村達治 NHK 技師長の発言）

104　NHK 技術局送信センター編（1999）『千代田・芝放送所史：芝放送所開局 40 周年記念』NHK 技術局送信センター、p81-82

105　1968（昭和 43）年 5 月 31 日午後 9 時 12 分に発生。停波時間は、NHK 総合が 16 分 2 秒、NHK 教育が 16 分 44 秒だった。

106　第 61 回国会参議院逓信委員会第 4 号 1969 年 2 月 25 日（野村達治 NHK 技師長の発言）

107　毎日新聞 1969 年 2 月 21 日夕刊「NHK が六五〇メートルのテレビ塔　代々木に UHF 用　百億円かけ　民放にも開放」

108　東京新聞 1969 年 3 月 1 日朝刊「殺気はらむタワー合戦　ひくにひかれぬ NHK と NTV」

109　電波新聞 1968 年 7 月 18 日「早ければ今秋に着工　NTV の新テレビ塔　〝他局の参加は歓迎〟」

110　針木康雄（1969）「実現性濃い正力タワーと受難の東京タワー」『財界』9 月 15 日号、財界研究所、p12
111　可児長英氏への聞き取り（2016 年 6 月 24 日）
112　朝日新聞 1969 年 3 月 30 日朝刊「正力代議士が政界引退表明」
113　第 61 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1969 年 3 月 31 日（河本敏夫郵政相の発言）
114　第 61 回国会衆議院逓信委員会第 5 号 1969 年 3 月 6 日（前田義徳 NHK 会長の発言）
115　第 61 回国会参議院逓信委員会第 6 号 1969 年 3 月 20 日（前田義徳 NHK 会長の発言）
116　毎日新聞 1969 年 2 月 21 日夕刊「NHK が六五〇メートルのテレビ塔　代々木に UHF 用　百億円かけ　民放にも開放」
117　毎日新聞 1969 年 2 月 21 日夕刊「NHK が六五〇メートルのテレビ塔　代々木に UHF 用　百億円かけ　民放にも開放」
118　高田元三郎・浅野賢澄・茅誠司・今道潤三・前田義徳（1967）「テレビ新時代（座談会）　日本放送連合会設立一〇周年にちなんで」『放送文化』8 月号、日本放送出版協会、p42（前田義徳の発言）
119　朝日新聞 1969 年 7 月 12 日朝刊「世界一かけテレビ塔合戦　両者譲らぬ力相撲　行司・郵政省　軍配に困る」
120　週刊現代 1968 年 8 月 1 日号「前途多難な世界一タワー建設」講談社、p48
121　電波タイムズ 1969 年 3 月 27 日「テレビ塔建設動き出す　NHK 建設委員会が発足」
122　日刊建設工業新聞 1969 年 7 月 4 日「NHK　来週中に確認申請へ　代々木放送タワー建設」
123　『NHK-UHF-TV TOWER 地震応答計算書（その 1）報告書』（1969 年 4 月 30 日）から『NHK-UHF-TV TOWER 地震応答計算書（その 7）報告書』（1969 年 6 月 11 日）まで、計 7 つの報告書が鹿島建設武藤研究室によって作成された。
124　第 61 回国会衆議院逓信委員会第 25 号 1969 年 6 月 4 日（前田義徳 NHK 会長の発言）
125　毎日新聞 7 月 3 日朝刊「高さ 600 メートル、工費は 158 億円　NHK タワー　近く建築申請」
126　朝日新聞 1969 年 7 月 3 日朝刊「世界一のタワー　NHK 来週申請　高さ 600 メートル、総工費 158 億円」
127　読売新聞 1969 年 7 月 19 日朝刊「五百五十メートルの正力タワー建築申請書を提出　福井日本テレビ社長が発表」
日刊建設通信 1969 年 7 月 21 日「鉄塔部分のみ　正力タワー確認申請」
128　小室紘和氏への聞き取り（2017 年 7 月 6 日）
129　電波新聞 1969 年 7 月 12 日「タワーの競合調整を　＜600 メートルタワーの建設＞　郵政相　NHK に指示」
130　電波タイムズ 1969 年 7 月 15 日「一本化調整を指示　タワー問題　河本郵相が事務当局に」
131　朝日新聞 1969 年 7 月 12 日朝刊「世界一かけテレビ塔合戦　両者譲らぬ力相撲　行司・郵政省　軍配に困る」
132　針木康雄（1969）「実現性濃い正力タワーと受難の東京タワー」『財界』1969 年 9 月 15 日号、財界研究所、p10

133　読売新聞 1969 年 7 月 19 日朝刊「五百五十メートルの正力タワー　建築申請書を提出　福井日本テレビ社長が発表」

134　電波新聞 1969 年 8 月 1 日「どう調整する？タワー競争　〝相乗りはご免〞NHK も NTV も　代わりを要求、東京タワー」

135　朝日新聞 1969 年 7 月 12 日朝刊「世界一かけテレビ塔合戦　両者譲らぬ力相撲　行司・郵政省　軍配に困る」

136　電波新聞 1969 年 8 月 11 日「六百メートルタワー具体化　NHK　設計・建設業者に提示」

137　電波新聞 1969 年 8 月 1 日「どう調整する？タワー競争　〝相乗りはご免〞　NHK も NTV も　代わりを要求、東京タワー」

138　読売新聞 1969 年 9 月 4 日朝刊「「正力タワー」との調整つくまで待つ　NHK タワーの着工」

139　国会社編（1969）「〝各国代表〞が悼む正力氏の生涯　抜群の意表を全うした巨人！」『国会』11 月号、国会社、p33

140　読売新聞 1969 年 10 月 25 日朝刊「正力タワー、NHK タワーとの調整　話し合いの用意　福井・日本テレビ社長談」

141　針木康雄（1969）「実現性濃い正力タワーと受難の東京タワー」『財界』1969 年 9 月 15 日号、財界研究所、p9

142　新聞之新聞 1985 年 5 月 21 日「メディア回遊記第 204 回粉飾の穴埋め策（柴田秀利）」

143　週刊文春 1969 年 12 月 15 日号「ビデオテープ！大荒れの日本テレビ株主総会」文藝春秋、p36

144　三田和夫（1991）『読売梁山泊の記者（ぶんや）たち　―戦後・新聞風雲録』紀尾井書房、p22

145　可児長英氏への聞き取り（2016 年 6 月 24 日）

146　村松剛（1990）「義弟を偲んで」『今もいつも：幼い子どもたちのために　―南日恒夫追悼集―』、p311

147　大宅壮一（1980）「三人の友を失う」『大宅壮一全集』第 9 巻、蒼洋社、p263

148　電波新聞 1970 年 1 月 10 日「24 階建てのセンターに着工　前田 NHK 会長が今年度の方針語る　長期構想で 70 年代とらえる番組を」

149　第 63 回国会衆議院逓信委員会第 3 号 1970 年 3 月 11 日（前田義徳 NHK 会長の発言）

150　毎日新聞 1970 年 1 月 9 日夕刊「新テレビ塔、共同で　NHK と NTV が手握る」

151　分部芳雄（1982）「アンテナ物語り」『TBS 放送事はじめ：有楽町から赤坂へ』東京放送旧友会発行、p60

152　大規模な住宅展示場はまず関西を中心につくられた。最初の例が 1966（昭和 41）年の「ABC モダン住宅展」（朝日放送主催）で、「モデル住宅展」（サンケイ新聞・阪急電鉄）、「明舞ハウジングセンター」（神戸新聞主催）、「KBS ハウジングセンター」（近畿放送（現京都放送）主催）と続いた。NTV ハウジングセンターは、東京地区における初めての本格的な住宅展示場だった。

第 4 章　610 メートル NHK タワー

1　井原道継（1958）「東京駅の将来計画」『鉄道建築ニュース』4 月号、鉄道建築協会、p10-19
東京駅超高層化計画の経緯については、大澤昭彦（2022）「日本の高層建築 100 年史　第 6 回超高層建築技術の礎：東京駅丸の内駅舎超高層化計画」『ビルディングレター』第 681 号、日本建築センター、p13-24 に詳しい。

2　佐藤眞逸編（2011）『武藤清先生と共に　鹿島建設武藤研究室・武藤構造力学研究所の記録』、p6

3　『ヨーロッパの 10 年』は、三上が家族のために記した回想録。

4　木村俊彦（1996）「自伝的回想 1950-1979」『新建築』6 月号、新建築社、p11

5　本田靖春（2015）『現代家系論』文春学藝ライブラリー、p108

6　読売新聞 1961 年 2 月 2 日朝刊「建築界の未来を描く　フーラー博士特別講演会」

7　三上祐三（1969）「海外ネットワーク：ヨーロッパ」『新建築』7 月号、新建築社、p121

8　三上祐三氏への聞き取り（2012 年 2 月 23 日）

9　「その后タワーの着工時期の延期に伴い敷地予定地を放送センター東側駐車場に変更し、この位置における周囲との調和をはかるため極力断面の小さい自立円筒型式のものとした。その後客観情勢の推移に伴い民間放送タワー計画を吸収して建設する方向に発展することとなつたため、従来の純電波塔としての機能を拡張し、展望台などを含めた公共的シンボルタワーとしてふさわしい機能・造形をもつものを検討することとした」（武藤構造力学研究所・日建設計工務株式会社編（1970）『NHK 放送センター総合整備鉄塔建設計画第一次報告書』）

10　電波新聞 1970 年 2 月 6 日「千二百万をめざす　NHK のカラー契約　前田会長今年度予算などを語る」

11　第 63 回国会参議院逓信委員会第 8 号 1970 年 3 月 19 日（前田義徳 NHK 会長の発言）

12　第 63 回国会参議院逓信委員会第 10 号 1970 年 3 月 26 日（前田義徳 NHK 会長の発言）

13　武藤構造力学研究所・日建設計工務株式会社編（1970）『NHK 放送センター総合整備鉄塔建設計画第一次報告書』

14　三上は、1969（昭和 44）年 5 月 28 日付のメモでデザイン・ポリシーを記している（三上のスケッチブック）。この時点では正式に NHK タワーの設計チームに入っておらず、武藤清と初めて会った直後だったが、既にタワーの構想を描いていたことがわかる。

15　第一次報告書の作成中の 1969（昭和 44）年 12 月 9 日付のメモで「蓮池さんがデザインが先走りすぎているといっていた」と三上は記している（三上のスケッチブック）。

16　三上祐三氏への聞き取り（2012 年 2 月 23 日）「NHK 内部でも、前田会長は C-7 案を特に好まれていたと聞いています」

17　武藤構造力学研究所・日建設計工務株式会社編（1970）『NHK 放送センター総合整備鉄塔建設計画第一次報告書』

18　1969（昭和 44）年 12 月 13 日に武藤清邸で行われた NHK との打ち合わせ時のメモで「敷地は表参道の線より NHK―体育カン間の歩道の延長上で中央芝生を妨げない位置がよい。神宮からははなしたい」と三上は記している（三上のスケッチブック）。

19　山本学治・三上祐三（1969）「歴史的環境への適合：ダラムの徒歩橋と無電塔」『建築文化』10 月号、彰国社、p75-88

20　三上祐三（1969）「ダラムの無電塔」『建築文化』10 月号、彰国社、p84

21　山本学治（1969）「アロプの設計思想」『建築文化』10 月号、彰国社、p88

22　春日由三（1959）「NHK 第 1 次 5 か年計画の概要：公共放送の発展のために」『電波時報』4 月号、電波振興会、p27-28

23　朝日新聞 1959 年 5 月 8 日朝刊「NHK テレビセンター　年度末までに着工　田辺専務帰国で促進」

24　第 46 回国会衆議院逓信委員会第 8 号 1964 年 3 月 5 日（前田義徳 NHK 副会長の発言）

25　「これに先だちまして、昭和三十二年に三十三年度予算案を組む前提として、ただいま申し上げた新龍土町の土地を決定するに至る段階としては、大蔵御当局からワシントンハイツの一部解除はあるいは可能であるかもしれないから、その土地を考えてはどうかというご示唆をいただいております。当時私どもは、現地を見まして、さらにアメリカ軍のその後の動向を察知いたしますと、そのような、実際にアメリカ軍が撤退する時期の不明な段階で、ワシントンハイツを考慮することは事実上不可能でございましたので、先ほど御説明申し上げましたように新龍土町を決定したわけでございます」（第 43 回国会参議院逓信委員会第 11 号 1963 年 3 月 6 日前田義徳 NHK 専務理事の発言）

26　朝日新聞 1958 年 12 月 9 日朝刊「米軍の返還地めぐり　官庁の間で奪いあい　調整、最後は閣議で大蔵省新ビル予算が悩み」

27　春日由三（1995）「演芸番組から編成・経営へ」『放送史への証言（２）～放送関係者の聞き取り調査から～』日本放送教育協会、p72

28　嶋崎彦八（1972）「東京都市計画代々木公園の生いたちとその変遷」『都市公園』2 月号、東京都公園協会、p17

29　嶋崎彦八（1972）「東京都市計画代々木公園の生いたちとその変遷」『都市公園』2 月号、東京都公園協会、p18

30　第 43 回国会衆議院逓信委員会第 11 号 1963 年 3 月 6 日（前田義徳 NHK 専務理事の発言）

31　『テレビセンター建築設計競技実施要項（1961 年 8 月）』（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

32　内田祥三が NHK テレビ・センター関連資料に書き記したメモ（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

33　宮内嘉久（1962）「NHK・TV センター指名設計競技：公正を欠くコンペ問題再検討の必要」『美術手帖』3 月号、美術出版社、p79

34　宮内嘉久（1962）「コンペ問題再検討の契機」『建築文化』2 月号、彰国社、p116

35　『テレビセンター建設に関する打合会（第 1 回）議事録（1961 年 3 月 6 日）』（東京都公文書館内田祥三文庫所蔵資料）

36　1909（明治42）年、陸軍省達第40号により、「自今各部隊ヲシテ之ヲ使用セシム」ることになった。以後、毎年、観兵式が行われることになる。

37　山田正男（2001）『東京の都市計画に携わって　―元東京都首都整備局長・山田正男氏に聞く―』、財団法人東京都新都市建設公社まちづくり支援センター、p103

38　三熊文雄・野村達治・河辺眷逸・木村勤（1985）「東京オリンピックの思い出」『ろくじ会記録』No.48、p5（野村達治の発言）

39　志賀信夫（1987）『前田義徳』「前田義徳」伝刊行会、p197

40　「一説には、野村会長が購入したものを阿部会長が使いたくなかったという両者の不仲説からの裏読みをするひともおったようだ」（志賀信夫（1987）『前田義徳』「前田義徳」伝刊行会、p197）。不仲説の背景にはNHK会長人事を巡る確執があったと考えられる。1957（昭和32）年11月、阿部の先々代の会長永田清が死去すると、岸信介首相が後任として野村秀雄を推す考えであることを自民党の川島正次郎幹事長が漏らした。これに当時NHK経営委員会委員長を務めていた阿部が反発した。NHK会長の任命権は経営委員会にあるにもかかわらず、政府が会長人事を進めていることに不快感を示したわけである。そこには、経営委員長の立場だけでなく、阿部個人の感情も含まれていたと思われる。阿部は、1956（昭和31）年に永田が会長に就任した時、会長候補の一人と目されていた。ただ、政治的対立から、阿部が経営委員長に就任することで決着した。こうした経緯から、永田の後任は阿部で落ち着くかと思われたが、岸は野村を推した。野村と阿部はともに新聞記者上がりだった。野村は朝日新聞、阿部は毎日新聞の出身。野村は、自らが辞任した後の会長に、同じく朝日出身の前田義徳（当時専務理事）を昇格させる意向を持っていた。その意図は人事の若返りにあった。しかし、前田を登用することで、朝日新聞がNHKを牛耳っているとの噂を立てられることを野村は危惧し、結果的に野村の後任は阿部となった。以上から推測するに、阿部が野村に対して何らかの感情を抱いていたとしても不思議はなかった。

41　第43回国会衆議院オリンピック東京大会準備促進特別委員会第3号1963年2月7日（前田義徳NHK専務理事の発言）

42　「この管財局に要請書を出したのは、なるほど三十七年の八月でございますが、それまでの間に、やはり陳情書を出すまでには、各方面の了解を得なければならぬということで手間がかかったわけで、東京都に対しても、必ずしもそれまで放っておいたわけではない」（第43回国会参議院逓信委員会第8号1963年2月21日阿部眞之助NHK会長の発言）

43　蓮池正（1985）「放送センター建設の回想談」『ろくじ会記録』No.50-2、p9

44　嶋崎彦八（1972）「東京都市計画代々木公園の生いたちとその変遷」『都市公園』2月号、東京都公園協会、p18

45　嶋崎彦八（1972）「東京都市計画代々木公園の生いたちとその変遷」『都市公園』2月号、東京都公園協会、p21

46　志賀信夫（1987）『前田義徳』「前田義徳」伝刊行会、p198-199

47　田原総一朗（1993）『メディア・ウォーズ：テレビ仕掛人たちの興亡』講談社文庫、p161

48　志賀信夫（1987）『前田義徳』「前田義徳」伝刊行会、p198
黒川次郎（2019）「公共放送の経営課題への対応：証言を基に読みとく放送制度②」『放送研究と調査』３月号、NHK 放送文化研究所、p34-35
49　佐藤榮作（1998）『佐藤榮作日記』第 1 巻、朝日新聞社、p519
50　鈴木俊一（2005）『時代の証言者』No.47、読売新聞社、p48
51　岸田日出刀・中山克己・高山英華・村田政真・角田栄・堀内亨一・浜口隆一（1964）「座談会オリンピック施設計画を展望する」『新建築』7 月号、新建築社、p139
52　「岸田日出刀」編集委員会編（1972）『岸田日出刀』上巻、相模書房、p147-150
53　岸田日出刀・中山克己・高山英華・角田栄・村田政真・堀内亨一・浜口隆一（1964）「座談会オリンピック施設計画を展望する」『新建築』7 月号、新建築社、p139
54　読売新聞 1963 年 1 月 14 日夕刊「〝政府の力に屈す〟代々木村テレビセンター　都議会で東知事」
55　読売新聞 1963 年 2 月 11 日夕刊「NHK に割愛やむをえない　五輪村問題で東都知事」
56　田原総一朗（1993）『メディア・ウォーズ：テレビ仕掛人たちの興亡』講談社文庫、 p 161
57　建部順東京都議会オリンピック東京大会準備協議会会長から東龍太郎東京都知事宛通知「都市計画代々木公園事業区域内の国有地の一部に日本放送協会放送センターを設置することについて（1963 年 2 月 25 日）」
58　「前田邸経緯書」（調達庁不動産部管理二課作成、国立公文書館所蔵資料）
59　前田家の財産税は 9 割に及んだとされる（酒井美意子（1995）『元華族たちの戦後史　没落、流転、激動の半世紀』、宙出版）。
60　山田正男（1999）「新宿副都心の建設」『高度成長期への証言』下巻、日本経済評論社、p187
61　三上祐三氏への聞き取り（2012 年 2 月 23 日）
62　武藤清（1970）「内藤先生の工学的業績をしのんで」『建築雑誌』12 月号、日本建築学会、p35
63　三上祐三の残したメモによると、1971（昭和 46）年 5 月 2 日に蓮池正 NHK 放送センター建設本部副本部長と会った際、計画のペースダウンの指示があったようである（三上のスケッチブック）。「slow down は予算の技術的問題で客観情勢の変化のためではなく、それはむしろすこしずつ進展している」と三上は記しており、あくまでも予算上の問題と NHK からは説明を受けていたことがうかがえる。
64　第 75 回国会参議院逓信委員会第 5 号 1975 年 3 月 25 日（小野吉郎 NHK 会長の発言）
65　第 68 回国会参議院逓信委員会第 7 号 1972 年 3 月 28 日（廣瀬正雄郵政相の発言）
66　朝日新聞 1974 年 10 月 1 日朝刊「テレビ局　UHF 移行は白紙？　電波監理局長示唆　六年来の方針撤回」
67　毎日新聞 1978 年 2 月 4 日朝刊「UHF 移行、白紙に　TV の周波数」
68　朝日新聞 1972 年 12 月 9 日朝刊「NHK 放送会館　354 億 6 千万円で落札　三菱地所　3.3 平方メートル 1 千万円」
69　滝谷由亀・堀川潭編（1974）『歴代郵政大臣回顧録』第 5 巻、通信研究会、p229
70　朝日新聞 1974 年 3 月 19 日夕刊「NHK 赤字予算をつく　頭打ちの受信料」
71　第 65 回国会参議院逓信委員会第 7 号 1971 年 3 月 23 日（前田義徳 NHK 会長の発言）

72　第 68 回国会参議院逓信委員会第 3 号 1972 年 3 月 14 日（前田義徳 NHK 会長の発言）
73　1971（昭和 46）年 6 月都議会での所信表明（読売新聞 1975 年 2 月 17 日朝刊「この大事な時になぜ…美濃部語録八年」）
74　宮川淳二（1977）「第二国立劇場はどこへ行った」『音楽芸術』4 月号、音楽之友社、p26
75　朝日新聞 1978 年 3 月 3 日朝刊「池袋の超高層電波障害　「他のビルとの複合」　建築主が回答」
76　日本テレビ放送網編（1984）『テレビ塔物語』日本テレビ放送網、p90
77　サンデー毎日 1978 年 9 月 3 日号「タワー計画とともに終わった青春」毎日新聞社、p77
78　鹿島建設武藤研究室（1979）『100 階建への挑戦』鹿島建設武藤研究室
79　三上祐三氏への聞き取り（2012 年 2 月 23 日）
80　武藤構造力学研究所・日建設計編（1970）『NHK 放送センター総合整備鉄塔建設計画第二次報告書』、p8

終章　東京ドームと東京スカイツリー

1　アストロドーム完成後、1975 年にニューオーリンズで「スーパードーム」、デトロイトで「シルバードーム」が竣工、1976 年にはシアトルで「キングドーム」が建設され、アメリカはドーム・ブームに沸いた。

2　ドームが完成した年に、球団名がコルト 45s からアストロズに変更。球場の名称もコルツドームからアストロドームとなった。

3　真鍋八千代（1967）『衆は愚にあらず』ダイヤモンド社、p152

4　読売新聞 1966 年 12 月 21 日朝刊「屋根つき球場を提案　パのオーナー懇談会」
週刊ベースボール 1972 年 12 月 25 日号「日本初の屋根付き球場へ　百億円投資の松園オーナー」ベースボール・マガジン社、p19

5　週刊文春 1969 年 9 月 8 日号「高かった「雨天決行」の代償」文藝春秋、p19
週刊ベースボール 1972 年 12 月 25 日号「日本初の屋根付き球場へ　百億円投資の松園オーナー」ベースボール・マガジン社、p18
週刊現代 1972 年 12 月 14 日号「東京に全天候球場を作る松園構想」講談社、p31

6　毎日新聞 1979 年 7 月 21 日朝刊「名古屋に「屋根つき球場」　中日の本拠地に　150 億円投じて収容 4～6 万人　日本陶器が工場跡地に計画」
読売新聞 1980 年 4 月 23 日夕刊「夢の球場ダッシュ　ナゴヤは民間「ノリタケドーム」大阪は一大拠点「多目的ホール」」
体育施設出版編（1981）「ノリタケドーム　わが国初の屋根つきスタジアム　いよいよ来春着工　約 4 万 3000 人収容・幅広い用途で　名古屋の一大名所に」『月刊体育施設』8 月号、体育施設出版、p94-98

7　自治体主導のドーム計画は、千葉や大阪でも練られていた。1972（昭和 47）年には友納武人千葉県知事が浦安の埋め立て地にドーム球場を誘致する意向を語ったが、結局、この場所には東京ディズニーランドが建設された。

8　マイタウン東京構想で掲げられた江戸東京博物館、池袋の東京芸術劇場、レインボーブリッジ等は、のちに実現する。

9　毎日新聞 1982 年 6 月 27 日朝刊「日本一になったら屋根付き球場」

10　読売新聞 1982 年 10 月 31 日朝刊「西武球場、屋根付きに　堤オーナー検討」

11　週刊ベースボール 1975 年 9 月 15 日号「大リーグショック情報　SF ジャイアンツは本当に日本人に身売りされるのか⁉」ベースボール・マガジン社、p114

12　読売新聞 1980 年 4 月 23 日夕刊「夢の球場ダッシュ　ナゴヤは民間「ノリタケドーム」大阪は一大拠点「多目的ホール」」

13　保坂誠（1990）「東京ドームのヒントを与えてくれた柴田さん」『炎のごとく　水のごとく：次代に賭けた柴田秀利遺稿集』「柴田秀利遺稿集」刊行会、p362

14　ほかにも、飛島建設「ザ・ドーム 55」、フジタ工業「スライドーム」、間組「スペースドーム」、三井建設「スカイウェーブ」、前田建設「デュアルドームⅡ」、西松建設「トレンディドーム」、戸田建設「アップル・ドーム」等もあった。

15　藤森照信（1997）『建築探偵雨天決行』朝日文庫、p31

16　ディヤン・スジック（2011）『ノーマン・フォスター　建築とともに生きる』TOTO 出版、p283

17　朝日新聞 1997 年 3 月 11 日朝刊「地上デジタル放送 2000 年までに導入　来年秋から実験」

18　蓮池正（1985）「放送センター建設の回想談」『ろくじ会記録』No.50-2、1985 年 12 月 20 日、p5

19　日本経済新聞 1998 年 6 月 25 日朝刊「埼玉県が誘致へ、新都心に〝第 2 東京タワー〟―高さ 500 メートル、日本一に」

朝日新聞 1998 年 10 月 3 日夕刊「「高～いのが欲しい」　「新」東京タワー争奪戦　埼玉 VS. 東京」

20　佐藤は、地方放送局、ゼネコン、電機メーカー等と「デジタル情報事業研究会」を立ち上げ、1996 年頃からタワーを検討していたという。

21　日本経済新聞 1998 年 10 月 19 日朝刊「地上波デジタル電波塔、4 案浮上、テレビ局困惑―埼玉や多摩で構想」

22　毎日新聞 1998 年 10 月 14 日朝刊「デジタル放送で〝シンボル論争〟過熱―新東京タワー・さいたまタワー」

23　日本経済新聞 2000 年 7 月 19 日朝刊「新宿に高さ 600 メートルタワー、JR 東日本が検討―地上波デジタル向け」

24　産経新聞 2000 年 8 月 26 日夕刊「高さ 600 メートル世界最高のタワー　デジタル TV 塔に　新宿南口に計画中」

25　読売新聞 2001 年 2 月 2 日朝刊「秋葉原に第 2 東京タワー構想　600ｍ級、デジタル放送に対応　最終調整へ」

26　日本経済新聞 2001 年 5 月 17 日朝刊「秋葉原再開発計画、都、第 2 東京タワー断念―事業主体固まらず」

27　朝日新聞 2003 年 12 月 18 日朝刊「600 メートル級新タワー構想　在京 6 局、地上デジタル放送に対応」

28　読売新聞 2006 年 4 月 1 日朝刊「第 2 東京タワーが決定　NHK と民放、思惑一致　混信対策には課題も（解説）」

29　朝日新聞 2002 年 6 月 18 日朝刊「世界最大級の新東京タワー、上野に？　候補地選び「切り札」」

30　週刊朝日 2002 年 7 月 5 日号「新東京タワーが上野に建つ!?　地元の期待と困惑」朝日新聞出版、p188

31　産経新聞 2004 年 1 月 22 日朝刊「どこに建つ？第 2 東京タワー　NHK、民放 5 社合意で誘致合戦が再燃」

32　朝日新聞 2004 年 4 月 29 日朝刊「「新東京タワーは浅草に」　台東区の準備会」

33　朝日新聞 2004 年 7 月 7 日朝刊「新タワー誘致に企画会社設立へ　台東区の準備会」

34　産経新聞 2004 年 10 月 3 日朝刊「第 2 東京タワーで誘致合戦　資金調達の明示がカギ」

35　朝日新聞 2004 年 6 月 8 日 朝刊「第 2 東京タワー「入谷・東六月にぜひ」足立区が提案」
毎日新聞 2004 年 9 月 9 日「第 2 東京タワー建設構想　誘致合戦「秋の陣」」
36　読売新聞 2004 年 4 月 2 日朝刊「新タワー誘致へ　県、さいたま市が合同事務局」
37　日本経済新聞 2004 年 5 月 22 日朝刊「第二東京タワー、誘致合戦が再燃、実現へハードル」
朝日新聞 2004 年 9 月 22 日朝刊「新東京タワー誘致へ豊島区が名乗り　地元企業と準備委結成」
38　日本経済新聞 2004 年 5 月 22 日朝刊「第二東京タワー、誘致合戦が再燃、実現へハードル」
39　読売新聞 2004 年 10 月 2 日朝刊「第 2 東京タワー　誘致熱、あちこちで沸「塔」」
40　朝日新聞 2004 年 11 月 26 日朝刊「新東京タワー誘致、墨田区長は「押上地区に」」
朝日新聞 2004 年 12 月 16 日朝刊「「墨田に新東京タワー」　区が協力要請　東武「前向き」」
毎日新聞 2005 年 2 月 8 日朝刊「東武鉄道：新東京タワー誘致、推進表明」
41　朝日新聞 2004 年 12 月 25 日朝刊「「新東京タワー、としまえんに」　練馬区も誘致に名乗り」
読売新聞 2004 年 12 月 25 日朝刊「第 2 東京タワー、練馬に誘致　「としまえん」に高さ 700 メートル　推進協計画」
42　読売新聞 2005 年 3 月 29 日朝刊「第 2 東京タワー候補地発表　歓迎とがっかり」
43　朝日新聞 2005 年 5 月 21 日朝刊「新東京タワー　都市戦略に立つ建設を」
44　Japan Times 2012 年 5 月 23 日付 ”Tower's developers considered several figures before finally settling on 634”によると、東京スカイツリーの高さが 634m に決まる過程では、「628」「633」「645」「666」も候補に挙がったという。「628」は、隅田川を挟んだ対岸にある浅草寺が創建された 628 年にちなんだものである。建設地は墨田区内だが、台東区と連携することが選定の条件だったことから、台東区の古くからのシンボルにちなむことでバランスを取ろうとしたのかもしれない。なお、浅草は東武伊勢崎線（東武スカイツリーライン）の終着駅でもある。また、「633」は日本の教育システム 6・3・3 年制、「645」は大化の改新の年からとったものである。だが、これらの数字は、外国人観光客には意図が伝わりにくいとして却下された。最も高い「666」は、東京タワーの高さ 333m の二倍の数字である。新旧の東京のランドマークを対比させる上ではわかりやすい数字だった。だが、アンテナを除く塔本体の高さが既に 495m で決まっていたために設計変更が難しく、アンテナを追加しても構造上 640m が限界だった。最終的に、「武蔵の国」の語呂合わせで「634」に落ち着くことになる。
45　日建設計の西村浩執行役員経営企画室長（2012 年当時）は、「不思議ですね。610 メートルは東京スカイツリーの計画発表とまさに同じ高さです。（スペックも）似てますね」「これを歴史は繰り返すというのでしょうか」と述べている（山下努・大澤昭彦（2012）「幻の代々木タワー計画：高さ 610 メートル　43 年前の「スカイツリー」」『AERA』7 月 16 日号、朝日新聞出版、p49）。
46　シカゴ・スパイアは、2005 年 7 月に計画が発表され、2007 年に着工したが、翌年のリーマンショックの影響で資金調達が進まず中止された。
47　タワー建設地付近は海抜 900m の位置を飛行機が通るため、この位置から 300m の範囲内に建造物をつくることができなかった。

さいごに

1　永井賢城（1966）「久米先生とともに」『久米権九郎追憶誌』久米建築事務所、p289
2　ニュース担当グループ委員会編（1979）「武藤清先生と語る」『土と基礎』9 月号、土質工学会、p93